

JFL 入門班級導入單元內自由進度學習的實踐研究： 以大學暑期先修課程為例

黃聖文

銘傳大學應用日語學系專案助理教授

摘要

本論文於台灣北部T大學的暑期先修課程中以實現「個別化學習」及「協働學習」為目標，進行為期一個月的「單元內自由進度學習」的實踐研究。研究對象為來自各高中共58名的JFL入門班級學習者。研究透過定期測驗成績、問卷調查及2名學習者的PAC分析結果來進行分析及考察。

結果顯示，實施此教學模式的班級在定期測驗成績上顯著高於常規學期的班級。此外，從問卷調查及PAC分析結果得知，學習者在課堂上能自由地進行學習，並透過與他人互動，形成積極態度並提升學習動機。然而，本實踐中仍存在如小組活動方式、反思方法等問題，需作為未來研究及實踐的課題。

關鍵詞：單元內自由進度學習、初級日語、非主修日語學習者、PAC分析、暑期先修班

受理日期：2025年02月03日

通過日期：2025年06月06日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202506_(44).0003

The Practice of Self-Paced Learning Within Units in Introductory JFL Classes: A Case Study of University Summer Pre-Enrollment Programs

Huang, Sheng-Wen

Project Assistant Professor of Department of Applied
Japanese, MCU

Abstract

This study investigates the potential of Self-Paced Learning in Japanese education by incorporating "Self-Paced Learning within units" into a summer program at T University in northern Taiwan. Targeting "individualized" and "collaborative learning," 58 beginner-level JFL learners from various high schools participated under an early enrollment system. The effectiveness was assessed through test scores, surveys, and Personal Attitude Construct. Results showed that this approach enhanced test performance, supported self-directed learning, and improved motivation through peer interactions. However, challenges such as refining group activities and reflection methods remain areas for future improvement.

Keywords: Self-Paced Learning within units, Basic Japanese Language, Non-major Japanese Language Learners, Personal Attitude Construct, Summer Pre-Enrollment Program

JFL入門期クラスにおける単元内自由進度学習の実践 —大学早期履修制度による夏期講座クラスでの導入事例—

黄聖文

銘伝大学応用日本語学科専案助理教授

要旨

本稿は日本語教育における自由進度学習の可能性を探ることを目的として、台湾北部 T 大学の夏期講座において「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を目指して「単元内自由進度学習」を取り入れた実践を行ったものである。前期の授業を夏季休暇中に早期履修する制度を通して各高校から集まった 58 名の学習者が履修する JFL 入門期クラスを対象とし、定期テストの成績、アンケート調査、協力者 2 名による PAC 分析の結果から、その効果について検討した。

その結果、定期テストの成績において実施クラスは通常学期のクラスよりも高いことがわかった。また、アンケート調査、PAC 分析の結果、本実践において学習者は教室で自由に学習を進めることができ、多様な他者とのインタラクションを通して、積極的な態度が形成され、学習意欲が上がったことが明らかになった。しかし、グループワークのやり方の調整、振り返りの仕方といった問題が残っており、今後の課題とする。

キーワード：単元内自由進度学習、初級日本語、非専攻日本語学習者、PAC分析、早期履修制度

JFL入門期クラスにおける単元内自由進度学習の実践 —大学早期履修制度による夏期講座クラスでの導入事例—

黄聖文

銘伝大学応用日本語学科専案助理教授

1. はじめに

国連では 2015 年に 17 の目標を含む SDGs が採択され、目標 4 は「すべての人々への、包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」ことである。そのための手段の一つとして、「4. a 子ども、障害及びジェンダーに配慮した教育施設を構築・改良し、すべての人々に安全で非暴力的、包摂的、効果的な学習環境を提供できるようにする」が挙げられている¹。しかし、現状は理想的と言えないのではないだろうか。大学の大量化及び統合教育の推進により、大学生は以前よりも多様化しているにもかかわらず、多くの授業は大人数のクラスで限られた時間内で決められた進度に追われるため、一斉授業では個々の学習者のニーズに対応できていない。全ての学習者にとって包摂的、効果的な学習環境という SDGs で掲げられている目標に達するのは困難である。

また、現在ではインターネットに接続して検索エンジンや ChatGPT などの生成 AI を使うことで、情報や知識が即座に得られ、学校に行かなくても大抵のことは学べるようになり、学歴や学校を不要とする主張すら現れた。さらに近年、コロナによりオンラインミーティングのツールが更なる進化を遂げ、リモート授業が容易になり、人々の受容も進んだ。多くの人々が同一の物理的空間と時刻を共有する対面授業の必要性和意味が問われている。

筆者は 2018 年から「ICT 技術を借りて教師による説明を教室外に移し、教室では協働学習をする」という反転授業を非専攻の JFL

¹ 外務省（不明）『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ 仮訳』（<https://reurl.cc/4j2Y2D>）（2025.01.10 閲覧）

日本語教育における入門段階の授業に取り入れ、一連の実践をしてきた。反転授業の導入により、学習意欲の向上、自律学習及び生涯学習の力の促進、教室の雰囲気の変化（黄 2020）が見られ、対面授業より学習者が能動的になった。授業活動の導入により、「自律学習」のみならず、「異質な集団での協働力」、「コミュニケーション能力」の養成目標にも近づき（黄 2021）、教室がより包摂的で効果的な学習環境となった。

2023 年の夏季休暇期間、筆者は大学で早期履修制度²の授業を担当することになった。多様な学習者一人ひとりに対応するため、どうすれば一斉授業に逆戻りせずに、反転授業と対面授業の長所を生かして多様な学習者に効果的な学習環境を提供し、教室を包摂的な学習環境にできるのかを模索するなか、「自由進度学習」の方法に辿り着いた。

自由進度学習とは教師が実施する学習内容のフレーム内で学習者が課題を自ら決定し、計画を立てて自分のペースで進め、その過程でクラスメイトと相互に作用しながら学びを深めていくことを目指した学習スタイルである（渡辺 2023）。自由進度学習の発想に基づくオリジナルの実践は 1980 年代初頭に愛知県の小学校で行われたとされており、実施方法によって、「単元内自由進度学習」（単元の枠組み内で実施）、「教科内自由進度学習」（教科の枠組み内で実施）、「全教科内自由進度学習」（学校の全教科の枠組み内で実施）、「全般的自由進度学習」（学習全般にわたって実施）に分けることができる（難波 2023）。近年、ICT の発展により、自由進度学習の実現が容易になった。さらに、2021 年 1 月に行われた日本中教審議会の答申では「個別最適な学び」と「協働的な学び」³を実現する学

² 教育部と大学招生委員聯合會の指導の下で、中央大学が主催し、全国 12 大学が加盟しており、開講された必修科目の単位を互いに認定できるプログラムである。夏季休暇明けに加盟大学に入学する新生が休み期間を利用し、希望する授業を履修登録し、一学期分の授業を一か月間で履修できる。

³ 「個別最適な学び」には教師による「指導の個別化」と、子供たちが自ら学習状況を把握し、主体的に学習を調整する「学習の個性化」が含まれる。また、「孤立した学び」に陥らないよう、多様な他者と協働しながら他者を尊重し、

習スタイルの1つとして取り上げられ、再び注目を浴びている⁴。

日本語教育における自由進度学習はまだ実践研究が少なく、特にJFLの入門期における実施の可能性に興味を持った。そこで本稿では、台湾北部の総合大学（以下、T大学）における早期履修制度による夏季講座クラスにおいて、多様な学習者にとって効果的かつ学習者同士が互いに学び合う学習環境の実現を目指し、一か月にわたり「単元内自由進度学習」を実施した。そして終了後、定期試験の成績、アンケート調査、調査協力者2名によるPAC分析の結果によって学習者の変化を検証した。また、反転授業を実施した通常学期の5クラスと比較し、学習効果を把握するとともに、自由進度学習の可能性について論じていきたい。

2. 単元内自由進度学習に関する先行研究

単元内自由進度学習の実践事例としては、日本では小学校の算数科での取り組みに富士村（2022）、理科での取り組みに石原・泰山（2023）などがある。また、中学校での実践事例としては、理科での実践に比嘉（2002）と北浜・小林（2023）、歴史科での導入に矢澤ほか（2022）と矢澤ほか（2023）が挙げられる。

比嘉（2002）では、選択の自由が生徒の興味を引きつけ、学習に対する目標設定、学習計画を立てる力、責任感が向上し、学習内容を楽しく理解できたと報告している。また、授業中の教師による直接的な指導と評価の機会の増加は、学習内容の理解を深め、つまづきを減らす効果があったと述べている。しかし、生徒同士の協働学習の機会が少なかったことから、他者からの学びが限定され、思考力の低い生徒と高い生徒の学習差がさらに広がる可能性があるとして指摘している。

持続可能な社会の創り手となるために必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」も重要である（文部科学省 2021）。

⁴ 文部科学省（2022）「義務教育の在り方ワーキンググループ（第2回）議事録」（<https://reurl.cc/G4M5Ky>）（2025.01.10 閲覧）

富士村（2022）では生徒の振り返りの分析から、「集中して取り組めた」「友達と教え合って説明する力がついた」「自力で解くほうがしっかり理解できた」「発展問題に挑戦でき、達成感を味わった」といった肯定的な反応が得られた。また、生徒が自分自身の学び方を見直し、必要に応じてグループを組ませ、自分のペースで学習に取り組むことで、自主性と主体性が高まり、学習意欲が向上したと報告している。

矢澤ほか（2022）では、従来の授業と比較し、学習内容が決まっていたとしても生徒が興味・関心のある課題に自由に時間をかけて深く追究できる環境が提供された。また、生徒が思考ツールを使い、学習計画を立て、ICTツールを活用し、互いに追究した内容を持ち、より関連づけることで、主体的かつ協働的な学習が促され、学習の深化につながったと報告している。

矢澤ほか（2023）では、教師が用意した思考の整理の仕方の難易度に差があるコースから生徒が各自、自分の力に応じたコースを選択し、学習を行った。最後まで一人で取り組んだり、必要に応じて友達と意見を交わしたりしながら追究を進めることで、「歴史的な見方・考え方」を働かせながら、問いの解決に向かうことができたと報告している。

北濱・小林（2023）では、理解度調査において単元内自由進度学習が取り入れられた実験群は一斉授業を行った統制群よりも平均値が高かった。授業者によって時間を区切ることなく、取り組む時間を自由に決める環境では生徒が学習に集中し、より深く理解し、協働学習に取り組むことができたため、「粘り強い取り組み」と「自ら学習を調整する意識」が高まるとともに、学習への取り組みやすさや内容の理解しやすさを感じる生徒が多く見られたと報告している。

石原・泰山（2023）では、単元末テストの結果から単元内自由進度学習が基礎的な知識の習得において、教師主導の学習と同等の効果があることと報告している。また、クラウドを活用して他者の

考えを積極的に参照した生徒は、そうでない生徒に比べて単元末テストの点数が有意に高く、他者との相互作用を通じて学力向上に寄与する可能性があるとしている。

以上の先行研究から、単元内自由進度学習において教師による時間の区切りがなく、提示されたガイダンスに沿って自由に学習に取り組める環境において、学習者は自ら学習を調整しながら学習に専念し、粘り強く学習できたことが示された。それによって、学習意欲、学習に対する責任感、問題解決力、自己調整型学習力、学習内容の理解が向上したことがわかった。さらに、他者である教師やクラスメイトとのインタラクションによって表現力の向上につながり、学習内容の理解もさらに深まる。つまり、単元内自由進度学習によって「個別最適な学び」と「協働的な学び」の促進が期待できる。しかし、協働学習の機会の確保の重要性も指摘されている。

上述した先行研究はいずれも小・中学生を対象とし、外国語以外の科目での実践例である。日本語教育における入門期クラスの大学生非専攻日本語学習者を対象とし、60名ほどの大人数クラスにおける実践の可能性と効果については検証が必要である。

3. 実践概要と調査方法

本節では実践概要（対象クラス、実施概要）と調査方法を述べる。

3.1 対象クラス

T大学では学科によって全ての学生が1年間または2年間日本語を必修として履修することになっている。通常学期は1コマ50分の授業が週に2コマあり、18週行われる。4技能を総合的に学ぶため、従来では殆どの時間が単語および文法説明、機械的な文法練習に費やされていたが、筆者の授業では2018年から反転授業を取り入れている。本実践クラスは1コマ50分の授業が週に9コマ（月、水、金3コマずつ）あり、一学期分の授業を一か月で集中的に学ぶことになる。反転授業を実施すると、休みの日（火、木）も

自宅で事前学習しなければならず、非専攻かつ初級の学習者にとっては負担が大きくなるのではないかと考えた。

そこで、本稿では非専攻の初級学習者を対象とし、T 大学で開講された早期履修制度による夏季講座クラス「日語（一）」において、個々の学習者が進度に合わせて教師が提供する教材を使い、自分のペースで学習を調整し、授業活動を通して他者と協働できる「単元内自由進度学習」を取り入れ、一か月間の実践を行った。

3.2 授業の実施

実施期間は 2023 年 7 月 24 日から 2023 年 8 月 18 日の一か月である。履修者登録者 58 名のうち 2 名⁵を除き、調査協力者は 56 名である。56 名のうち 54 名が T 大学の各学科に、2 名が他大学に進学する。学科単位で授業をする通常学期とは違い、学習者はそれぞれの専門が違い、さらに他の大学に入る学習者もいるため、通常学期の授業よりも多様な学習者によって構成されているクラスと言える。日本語レベルは N5 の勉強をしている 1 名を除き、殆どがゼロスタートである。

T 大学に入る予定の学習者は一年生の二学期には各学科のクラスで「日語（二）」を必修として履修しなければならないため、教材は大学の指定教材を使用し、進度は通常学期の 18 週間（1 週間に 2 コマ）の内容を週に 3 回計 12 回（1 回に 3 コマ）に合わせて調整した。通常学期では、片仮名は中間試験の範囲であるが、実践クラスでは授業開始から中間試験まで 2 週間しかないため、学習者の負担を考慮し、3 回目から教師による説明で行うことにした。それ以外の進度は通常学期と同様である。以下の表 1 は各回の学習目標と内容である。

⁵ 1 名は一度も授業に出席せず、1 名は 3 回しか出席しなかった。

表 1 各回の学習目標と内容⁶

回	テーマ	課	学習目標
1	文字と発音	50音	・オリエンテーション ・日本語の表記と母音、子音の構成が理解できる。 ・あ～は行を読み、書き、聞き、発音ができる。
2			・ま～ん行、濁音、半濁音、拗音を読み、書き、聞き、発音ができる。
3			・ア行を読み、書くことができる。 ・促音、長音を読み、書き、聞き、発音ができる。 ・時間に合わせて日本語で挨拶できる。
4	文字と発音 自己紹介	50音とL1	・カ行を読み、書くことができる。 ・正式な場面で日本語で簡単な自己紹介ができる。 ・正式な場面での自己紹介のマナーを理解し、名刺交換ができる。
5	文字と発音 自己紹介		・サ行を読み、書くことができる。 ・名前、職業について簡単な日本語で話したり聞いたりすることができる。
6	中間試験 文字と発音 自己紹介	50音とL2	・中間試験 ・日本語で年齢を聞いたり話したりすることができる。 ・日本語で家族構成を簡単に聞いたり話したりすることができる。
7	文字と発音 物や場所の紹介		・タ行を読み、書くことができる。 ・日本語で物の名前について聞いたり話したりすることができる。 ・日本語で忘れ物の持ち主は誰か聞くことができる。
8	文字と発音 物や場所の紹介		・ナ行を読み、書くことができる。 ・日本語で忘れ物の持ち主は誰か聞くことができる。
9	文字と発音 自己紹介 物や場所の紹介	50音とL3	・ハ行～ン行を読み、書くことができる。 ・日本語で国や住まいについて聞いたり話したりすることができる。 ・日本語で探している物や場所について聞いたり話したりすることができる。
10	文字と発音 買い物		・日本語で商品の値段と生産国について聞いたり話したりすることができる。
11	文字と発音 買い物		・日本語で買い物や注文ができる。
12	期末試験		・期末試験

初回の授業では、授業全体のオリエンテーションと2回目からの「単元内自由進度学習」の仕方の説明をし、各自でイヤホンや動画を視聴するに使う端末（スマートホン、ノートパソコン、タブレット）を必ず用意してくるように指示した。その後、一斉授業で「日本語の文字」、「あ～は行」を教え、授業活動を行った。2回目から、小テスト⁷や教師による片仮名の説明（3回目から）が終わった後、図1のような進度を学習者に提示し、その日にすべきことを説明する。説明は当日分のみだが、ペースの速い学習者が進度を終えたあと、次回の小テストの準備、発展課題⁸または次回分を勉強できるよう、毎回3回分の進度を提示する。また、ペースの遅い学習者や、前回の授業に出ていない学習者は、前回の進度を進めでもいい。

⁶ 通常学期の授業において筆者は指定教科書の学習項目を参照しながら、Candoによる目標設定をもとに学習者が日常で遭遇しそうな場面を考え、「文字と発音」、「自己紹介」、「物や場所の紹介」、「買い物」という4つで各週の目標及び内容を設定したものである。本実践の進度に合わせて調整した。

⁷ 中間試験と期末試験を除き、毎回必ず単語や文型などの小テストを行う。

⁸ 自己紹介の漫画にセリフをつけさせるなど、各学習項目を応用できる課題である。N5の受験準備をしている学習者にはN5の過去問を用意した。

月曜日 (07/31) 四回目 進度
 学習目標：・カ行を読み、書くことができる。
 ・正式な場面で日本語で簡単な自己紹介ができる。
 ・正式な場面での自己紹介のマナーを理解し、名刺交換ができる。

1. 小テスト (挨拶用語)
2. 教師によるカタカナの説明 (カ行)
3. L1: 単語の発音練習
4. 口頭試験 1 (個人): 単語の発音練習
5. L1: 01 の動画視聴 & WEB テスト & タスクシートの完成
6. 動画視聴: 「日本の形・謝罪」
7. 会話練習: 自己紹介 (初めの挨拶、名前、終わりの挨拶)
8. 口頭試験 2 (4人): 自己紹介 (初めの挨拶、名前、終わりの挨拶)
9. L1: 05 の動画視聴 & WEB テスト & タスクシートの完成
10. 動画視聴: 「名刺交換」
11. 自己紹介文 (初めの挨拶、名前、所属、終わりの挨拶) を書く
12. 会話練習: 自己紹介 (初めの挨拶、名前、所属、終わりの挨拶)
13. 口頭試験 3 (2人): 自己紹介 (初めの挨拶、名前、所属、終わりの挨拶)
14. L1: 06 の動画視聴 & WEB テスト & タスクシートの完成
15. L1: 教科書の読解練習
16. 発展課題 / 次回の小テストの準備 / 次回の学習内容

図 1 学習者に提示する進捗例

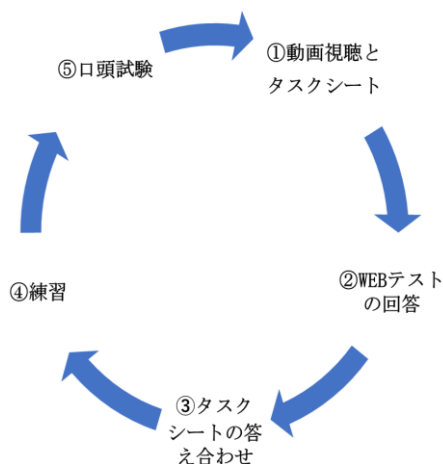


図 2 学習の流れ

学習項目にもよるが、学習の流れは大体図 2 のようにデザインした。学習者は教師が事前に TronClass にアップロードした自作の文法説明動画または教科書の文法説明を参照⁹しながら、タスクシートの文法説明の穴埋め¹⁰と翻訳練習¹¹を完成させ (①)、各文法の確認テスト¹²をする (②)。完成させたら、教師が事前に TronClass にアップロードした自作のタスクシート解説動画を見ながら、文法説明の穴埋めと翻訳練習の答え合わせをし (③)、練習をする (④)。練習は学習項目によって文法の練習や会話の練習、個人の練習やペアまたはグループの練習などがある。文法の練習の場合、終わったら各自で答え合わせできるように、解答を事前に TronClass にアップロードしている。

最後に、教師や TA¹³のところに行き、個人、ペア、グループの口頭試験を受ける (⑤)。自由進度学習では学習のペース、学習順序などを全て学習者に委ねるため、学習者の進捗と状況を把握する

⁹ 過去に学習者から動画より教科書のほうが自分の学習スタイルに合うと言われたことがある。そのため、本実践では文法は、説明動画を見るか教科書の文法説明を読むか、各自自分が好む学習スタイルで勉強できるようにした。

¹⁰ 文法説明のポイントを穴埋めにした。

¹¹ 各文法項目と教科書にある単語を練習させるために、各文法項目について 3 つから 5 つの中国語を日本語に訳す練習問題を作った。

¹² 文法説明動画や教科書の文法説明を読めば答えられる Web テストである。

¹³ T 大学の工業デザイン学科の四年生で N3 を取得している学生が担当する。

のは困難であり、特に言語学習の場合、発音や話す能力のチェックがさらに難しくなる。そのため、すべての学習項目の最後に個人、ペアまたはグループによる口頭試験を設けて各学習者の進捗と定着度をチェックする。また、教師と TA は口頭試験を受ける学習者がいない場合、机間巡視し、必要に応じて個別指導を行う。

このように一つの学習の流れを終えたら、次の学習項目に入る。毎回の授業は3つ程度の学習項目から構成されている。毎回の進捗は殆ど以上のように流れをデザインしたが、学習者には流れ、進捗、ペアやグループのメンバー、勉強の仕方¹⁴、場所¹⁵、休み時間¹⁶などは各自で決め、見通しを立て、自分のペースに合わせて学習プランを調整するように指示した。但し、学習者の学習状況を把握するために、その日の進捗を終えた学習者は、その日のタスクシートと練習用プリントを教師や TA にチェックしてもらい、発展課題や次のタスクシートを受け取るように指示した。

3.3 調査方法

実践クラスに履修登録をした学生は全部で 58 名おり、前述の理由で 56 名を調査協力者とする。自由進捗学習の効果を見るため、111 学年度通常学期の「日語（一）」の 5 クラスを対照クラスとする。中間試験と期末試験の両方ともを受けた学習者 242 名（実施クラス 56 名、対照クラス①28 名、対照クラス②42 名、対照クラス③34 名、対照クラス④43 名、対照クラス⑤39 名）¹⁷を調査対象者とする。表 2 は調査対象者の内訳である。

¹⁴ 一人で勉強するかクラスメイトと一緒に勉強するか、説明動画を見るか教科書の説明を読むか、練習してから答え合わせをするか答えをそのまま写すか、すべて学習者に委ねる。

¹⁵ 教室内の好きなところで行う。隣の空いている教室で勉強してもいい。

¹⁶ 授業の開始時刻と放課時刻は大学の定める通り行うが、休み時間は自由で、休みたいときに各自で休みをとらせることにした。

¹⁷ 通常学期の履修者には一年生のみならず、再履修者もいる。対照クラス①はメディアデザイン学科、②は電気工学科、③は機械・材料工学科、④は工学部（専攻未定）、⑤は化学・バイオテクノロジー学科の学生である。

表 2 調査対象者の内訳

	実施クラス	対照クラス				
		①	②	③	④	⑤
授業形態	単元内自由進度	反転授業 ¹⁸				
学習者数	56名	28名	42名	34名	43名	39名
日本語レベル	ゼロスタート					

調査は定期試験の結果、アンケート調査、PAC分析の3種類で行った。定期試験の結果は中間試験及び期末試験の2回の定期試験の結果に基づいて学習効果を検証した。アンケート調査とPAC分析は学習者の単元内自由進度学習に対するフィードバックを確認するために行った。

まず、定期試験の結果の分析では、中間試験及び期末試験の平均点、中央値、標準偏差値、不合格者数（60点以下）の項目で実施クラスと対照クラスの比較を行った。さらに両群の期末試験の成績に基づき、SPSSでt検定を実施し¹⁹、次の仮説を立てた²⁰。

帰無仮説（H0）：実施クラスの成績 ≤ 対照クラスの成績

対立仮説（H1）：実施クラスの成績 > 対照クラスの成績

アンケート調査は11回目の授業にTronClassにアップロードしたアンケートを記入させた。アンケートは5回目授業の終わりに、TronClassに自由に感想を書かせ、それを基に各設問を作成した（⑰と⑱を除く）。計18問で、5段階評価の選択式（16問）、二者択一形式（1問）、自由記述（1問）からなる。5段階評価の選択式は各質問に対して「同意する」「やや同意する」「どちらとも言えない」「やや同意しない」「同意しない」の5段階リッカート尺度にて

¹⁸ 対照クラスの教師、教材、動画、タスクシート、WEBテスト、小テスト、口頭練習は実施クラスと同一である。唯一の違いは、動画視聴・文法穴埋め・翻訳練習・WEBテストを授業前に教室外で済ませるよう指示し、教室内では自由行動ではなく教師の指示に従って教室活動をする点である。

¹⁹ 実施クラスの中間試験は片仮名を除き、ほぼ通常学期と同じ難易度で作成したもので、期末試験は通常学期と同じものを使用した。したがって、t検定による分析は通常学期とほぼ同じ内容の期末試験のみで行った。

²⁰ あくまでも学習効果を検証するために行った分析であり、「単元自由進度学習」と「反転授業」の優劣を比較するものではない。

回答を求めるものである。二者択一形式は設問⑰に対し、「同意する」「同意しない」のどちらかで回答を求め、中立的選択を避けて真の嗜好や立場を明らかにするものである。⑱の自由記述は学習者の感想から概念を抽出し、質的分析を行った。

表3 アンケート調査の設問

學習欲望・態度
①相較於傳統課程，這堂課的方式使我變得更主動地進行學習。
②相較於傳統課程，這堂課的方式使我變得更專注於學習。
③相較於傳統課程，這堂課的方式我覺得更容易學會新的知識。
④相較於傳統課程，這堂課的方式我覺得課堂的學習更加充實。
⑤相較於傳統課程，這堂課的學習方式使我開始會預習。
⑥相較於傳統課程，這堂課的學習方式使我開始會複習。
自我調整學習
⑦相較於傳統課程，這堂課的方式使我變得更常反省自己的學習。
⑧相較於傳統課程，這堂課的方式使我變得更能夠調整自己的學習。
⑨相較於傳統課程，這堂課的方式我更容易照自己步調學習。
學習環境
⑩相較於傳統課程，這堂課的方式使我有更多口說、手寫練習的機會。
⑪相較於傳統課程，這堂課的方式我覺得進度更自由、更有彈性。
⑫相較於傳統課程，這堂課的方式使我更有機會和同學互動。
⑬相較於傳統課程，這堂課的方式使我更有機會和老師(助教)互動。
⑭有影片所以不會因為不懂就放棄，比傳統課程更容易完成練習題。
⑮有影片所以比傳統課程更容易預習、複習。
⑯有影片所以比較不會因為沒跟上、恍神、沒聽懂導致沒跟上。
⑰我喜歡這樣的課程模式，希望未來有更多課程採取這樣的模式。
⑱請詳細說明為什麼喜歡／不喜歡這樣的課程模式？

本研究では、単元内自由進度学習に対する態度や内面的変化を深く理解するため、PAC分析法を用いた。PAC分析は、調査協力者の自由連想とそのクラスター構造からイメージや意味づけを探る質的手法であり、自発性や自律性を尊重し、調査協力者のスキーマに沿った連想が可能のため、新たな視点や関係性の発見に加え、少数事例にも信頼性の高い分析ができる(内藤2002)。

PAC分析のインタビューは第11回の授業に1名ずつ行ったが、調査者協力者Aは2時間で終わらず、その後に用事があったため、続きは翌日Google Meetで行った。表4はPAC分析のインタビュー概要と対象者についてまとめたものである。

表 4 PAC 分析のインタビュー概要

	年齢	性別	日本語レベル	時間	場所
A	17	女	ゼロスタート	8/16(2hr) 8/17(3hr)	教室 Google Meet
B	17	男	ゼロスタート	8/16(2hr)	教室

調査は、目的、データの利用、匿名化、個人情報の取扱い、参加が自由意志によること、同意の強制はなく、同意後も自由に撤回できる旨を明示し、同意を得た上で以下の手順²¹で行った。

- ア. 調査協力者に紙に印刷された刺激文²²を提示するとともに、口頭で読み上げさせる。
- イ. おおよそ縦 5.5cm、横 9cm の大きさのカードを 40 枚程度調査協力者の前に置き、頭に浮かばなくなるまで自由連想させる。
- ウ. 肯定か否定かに関わらず、重要度に基づいてカードを順序付けて並べ替えさせ、カードの右上に番号を振らせる。
- エ. 項目間の類似度距離行列を作成するために、ランダムに全ての対を選びながら、言葉の意味ではなく、直感で 7 段階評定尺度（非常に近い：1～非常に遠い：7）に基づいて評定させる。
- オ. エのデータに基づき、その場で統計ソフト（SPSS Ver. 22）でクラスター分析にかけ、デンドログラムを作成する。
- カ. デンドログラムの画面を見せながら、クラスターにわけさせる。
- キ. クラスターに基づき、（1）各項目群のイメージ（2）各項目群が併合された理由（3）群を比較させてイメージや解釈（4）各項目のイメージ（プラス：+、どちらともいえない：0、マイナス：-）（5）筆者が明らかにしたい内容について半構造インタビューを行う。

²¹ 手順は内藤（2002）を参照し、作成したものである。

²² 経過 16 次的課程，老師明確列出進度，學生在時間限制內(3 節課)照著進度自行看影片及完成手寫練習題後自行對答案，並在每個學習項目結束後有單人或小組的練習及口試。上課過程中可以自由休息，隨意走動，唯一的規定就只有盡量在時限內完成教師所列出的進度。完成進度後可以自由地做發展練習題、超越進度、休息。對於這樣的學習方式你有什麼想法？(請利用簡單的詞彙或簡短的句子寫出看了以上這段文字之後腦中所浮出的想法。)

4. 結果分析と考察

本節では、定期試験の比較、アンケート調査の結果、PAC 分析の結果について述べる。

4.1 定期試験の比較

本節では実施クラスと対照クラスの定期試験の比較結果を述べる。以下の表 5 は実施クラスと対照クラスの定期試験におけるそれぞれの平均点、中央値、標準偏差値を表したものである。まず、実施クラスは対照クラスに比べ、平均点、中央値とも上回っており、標準偏差値も小さかった。さらに、中間試験と期末試験の成績を比較すると、中央値において実施クラス及び対照クラスとも伸びたが、平均点または標準偏差値において、実施クラスの平均点がさらに伸び、標準偏差値も小さくなった。一方、対照クラスは⑤を除き、①と②の平均点が下がり、③と④の平均点が上がったが、4 つのクラスとも標準偏差値が拡大し、クラス内での成績の差がさらに広がった。

表 5 定期テストの結果

	中間試験			期末試験		
	平均点	中央値	標準偏差	平均点	中央値	標準偏差
実施クラス	86.6	91.5	16.9	87.5	93.0	15.5
対照クラス①	77.0	81.0	20.0	75.7	90.0	27.0
対照クラス②	69.4	72.0	20.1	67.2	76.0	26.2
対照クラス③	74.5	76.5	17.1	77.6	83.0	20.8
対照クラス④	74.6	80.0	19.9	74.8	80.0	20.2
対照クラス⑤	65.0	68.0	22.5	73.9	79.0	18.7

また、表 6 を見ると、中間試験と期末試験のいずれにおいても、実施クラスは 90～100 点の学習者が多く、90～100 と 80～89 を合わせると、中間試験が 81%、期末試験が 84%に達している。そして、不合格者の割合を見てみると、中間試験と期末試験のいずれにおいても、実施クラスのほうがはるかに少なかった。中間試験において実施クラス 8%、対照クラス 18%～38%、期末試験は実施クラス 6%、対照クラス 18%～26%であった。

表 6 定期テストの点数の分布

	実施クラス		対照クラス①		対照クラス②		対照クラス③		対照クラス④		対照クラス⑤	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
90～100	35	63%	8	29%	6	14%	8	24%	11	26%	5	13%
80～89	10	18%	9	32%	9	21%	7	21%	12	28%	7	18%
70～79	4	7%	6	21%	11	26%	7	21%	5	12%	6	15%
60～69	3	5%	0	0%	6	14%	6	18%	6	14%	6	15%

期 末 試 験	50~59	0	0%	1	4%	5	12%	3	9%	4	9%	6	15%
	40~49	2	4%	1	4%	0	0%	2	6%	3	7%	4	10%
	30~39	2	4%	2	7%	3	7%	1	3%	0	0%	3	8%
	0~29	0	0%	1	4%	2	5%	0	0%	2	5%	2	5%
期 末 試 験		実施クラス		対照クラス①		対照クラス②		対照クラス③		対照クラス④		対照クラス⑤	
	点数	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
	90~100	35	63%	14	50%	5	12%	15	44%	11	26%	10	26%
	80~89	12	21%	1	4%	12	29%	4	12%	11	26%	8	21%
	70~79	5	9%	5	18%	9	21%	8	24%	6	14%	5	13%
	60~69	1	2%	3	11%	5	12%	1	3%	5	12%	6	15%
	50~59	0	0%	1	4%	3	7%	1	3%	7	16%	6	15%
	40~49	1	2%	1	4%	2	5%	3	9%	1	2%	3	8%
	30~39	1	2%	0	0%	0	0%	1	3%	0	0%	0	0%
	0~29	1	2%	3	11%	6	14%	1	3%	2	5%	1	3%

さらなる検証を行うため、実施クラスと対照クラスの2群に分け、期末試験の成績データを用いてt検定を行った。図3グループ統計量から実践クラスは平均値において対照クラスより高く、標準偏差も小さいことが分かった。

実践クラスと対照クラスの期末試験の成績データに基づき、F検定を実施した結果、 $p < .001$ という統計値が得られ、統計的に有意な差があると確認され、「2群の母分散に差がある」という結論に達するため、等分散を仮定しない独立サンプルのt検定を行った。t検定を行った結果、有意な差が得られたため($t(132) = 5.261$, $p < .001$)、帰無仮説を棄却する。したがって、両群の成績は統計的に有意に異なり、実施クラスが対照クラスよりも成績が優れていることが示された。

	クラス	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
成績	実践クラス	56	87.50	15.466	2.067
	対照組	186	73.55	22.640	1.660

図3 グループ統計量

等分散性のためのLeveneの検定			二つの母平均の差の検定								
成績	等分数を仮定する	F	有意確率	t	df	有意確立		平均値の差	差の標準誤差	差の95%信頼区間	
						片側	両側			下限	上限
	等分数を仮定しない	12.211	.001	4.314	240	.000	.000	13.946	3.233	7.577	20.315
				5.261	132.467	.000	.000	13.946	2.651	8.703	19.190

図4 独立サンプルのt検定

以上の分析から、実施クラスは対照クラスに比べ、中間試験と期末試験のいずれにおいても平均点、中央値とも上回っており、標準偏差値も小さく、不合格者数も少なかった。さらに、t検定にかけ

た結果、両群の成績において有意な差が認められた。つまり、実施クラスは対照クラスよりも成績が優れていると言える。

4.2 アンケート調査

本節では実施クラスを対象に行ったアンケート調査の結果を示す。アンケート当日に欠席した2名を除いた54名分が回収できた。各設問に対する学習者の回答を表7に示す。アンケートの結果を見ると、全ての設問において中央値(3.0)を上回っており、質問項目⑤⑥⑦を除き、「同意する」「やや同意する」と答えた学習者が9割を占めている。特に自己調整(⑧⑨)、練習の機会の増加(⑩)の質問項目においては中央値が5.0に達している。さらに、⑰に対して全員が「同意する」と答えた。つまり、学習者の殆どが本実践の授業デザインを高く評価している²³。

表7 アンケート調査の結果

	同意する	やや同意する	どちらともいえない	やや同意しない	同意しない	Mean	SD
①	51.9%	44.4%	3.7%	0.0%	0.0%	4.0	1.0
②	50.0%	40.7%	9.3%	0.0%	0.0%	4.0	1.0
③	40.7%	51.9%	7.4%	0.0%	0.0%	4.0	1.0
④	46.3%	48.1%	5.6%	0.0%	0.0%	4.0	1.0
⑤	33.3%	38.9%	24.1%	3.7%	0.0%	4.0	0.8
⑥	33.3%	40.7%	25.9%	0.0%	0.0%	4.1	0.8
⑦	35.2%	38.9%	25.9%	0.0%	0.0%	4.0	1.0
⑧	55.6%	40.7%	3.7%	0.0%	0.0%	5.0	1.0
⑨	68.5%	29.6%	1.9%	0.0%	0.0%	5.0	1.0
⑩	63.0%	33.3%	3.7%	0.0%	0.0%	5.0	1.0
⑪	63.0%	33.3%	3.7%	0.0%	0.0%	4.6	0.6
⑫	59.3%	35.2%	5.6%	0.0%	0.0%	4.5	0.6
⑬	63.0%	31.5%	5.6%	0.0%	0.0%	4.6	0.6
⑭	48.1%	44.4%	7.4%	0.0%	0.0%	4.4	0.6
⑮	53.7%	37.0%	9.3%	0.0%	0.0%	4.4	0.7
⑯	57.4%	35.2%	7.4%	0.0%	0.0%	4.5	0.6
⑰	100.0%	---	---	---	0.0%	5.0	0.0

表8 自由記述をデータとした質的分析

カテゴリー	ラベル	具体例 ²⁴
自律学習	自己調整	(S16_K1) 自分のペースで学習できる。
	主体的な学び	(S31_K1) もっと自律的に課題を完成させるよう努力する。
	自己管理	(S04_K1) 何をいつするべきかを知ることができる。
個別化	学習効率	(S06_K2) 教師や他の学生の進度に縛られない。
	自ら進める	(S50_K1) 理解できない部分を繰り返し見られる。
	モチベーション	(S45_K2) もっと調べたり、理解しようとしたりする。
インタラクション	教師とのインタラクション	(S29_K2) 教師やTAとのやり取りの機会が増える。
	クラスメイトとのインタラクション	(S30_K2) クラスメイトとのインタラクションできる。
	助け合い	(S38_K2) 助けを求めたり、協力し合ったりできる。
	口頭試験	(S28_K2) 口頭試験で自分の進歩を感じることができる。

²³ 大学側による「教學評量問卷」においても「課程、教學與學習」、「助教」、「學生學習成果」についての質問項目が全項目(20問)4.5を上回っている。

²⁴ 紙幅の制限により、1例ずつ載せる。

アンケート調査と自由記述の分析から、以下のようにまとめることができる。柔軟で自由な授業デザインにより、学習者は〈自己調整〉[18名]を行いながら〈主体的な学び〉[5名]を進めることが可能となり、〈モチベーション〉[8名]が向上した。そして、伝統的な教育進度の制約から解放され、〈自己管理〉[6名]を効果的に行うことができた。この結果、聞き逃しや理解できないまま次の段階へ進むことなく、個々の個人にとっての〈学習効率〉[10名]が従来の授業より上がり、充実感を得ることができた。また、動画があるため、学習者は個人のニーズに応じて自主的に予習や復習を行い、学習を〈自ら進める〉[13名]ことが可能になった。さらに、〈口頭練習〉[10名]を通じて文法を定着させ、話す能力が向上し、達成感を感じ、話す勇気を得た。また、〈教師とのインタラクション〉[2名]や〈クラスメイトとのインタラクション〉[1名]が多く、〈助け合い〉[1名]ができた。一方で、教師の観察では、授業の振り返りは強制ではなく、毎回授業の最後に教師が TronClass にアップロードした振り返るシートを自由に記入させる形で行われたため、授業回数が進むにつれて記入する学習者が減り、最終的にはごく少数の学習者のみが記入するようになる状況が観察された。このことはアンケートの⑦における「同意する」と「やや同意する」の合計が8割に満たないという結果にも表れている。また、本実践では予習と復習は強制ではなく、自分の学習状況に合わせて自主的に行うものであるため、⑤⑥における「同意する」と「やや同意する」が他の項目より少なかった。

4.3 PAC 分析

本節では調査協力者2名の PAC 分析の結果について述べる。

4.3.1 調査協力者 A の事例

調査協力者 A のクラスター分析の結果は図5のようになった。刺激文から17項目を連想した。

まず連想項目の中で、重要度の高い順にほぼ1/3となる6項目を取り上げると、①〔口頭表現が好きになった〕、②〔口頭表現が重

要だ]、③ [家でも復習できる]、④ [大いに役に立つ]、⑤ [従来の授業形式なら興味はなかった]、⑥ [授業形式は斬新で従来の授業よりも好きだ]、となる。

この6項目から、調査協力者Aにとって言語学習で「口頭表現」が重要であることが分かる。そして、単元内自由進度学習は調査協力者Aに積極的な言語使用を促し、さらに口頭表現の重要性を認識させ、意欲を高めた。タスクシート+動画の学習スタイルという柔軟な学習スタイルにより、家庭での復習も容易になった。単元内自由進度学習は伝統的な授業形式よりも斬新で参加型のアプローチが学習効果と意欲を高めることを示している。次に全項目の単独でのイメージを見ると、プラスが14、どちらともいえないが3である。全体を見ると、調査協力者Aは単元内自由進度学習に好感を持っていると言えよう。

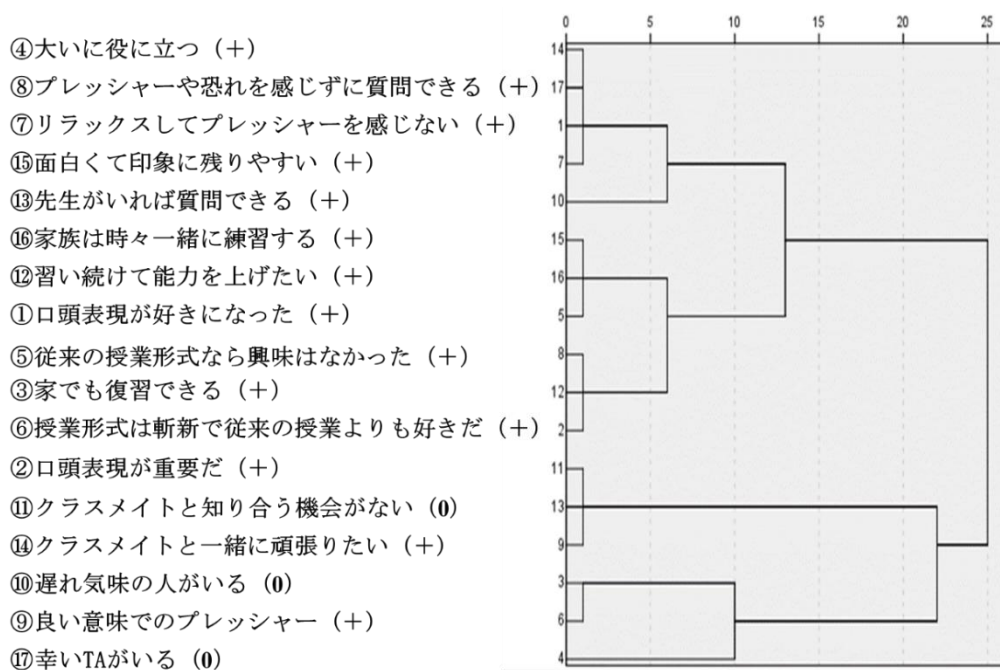


図5 調査協力者Aのデンドログラム²⁵

²⁵ 左の数値は重要順位であり、右の数値は想起順位であり、各項目の後ろの()内の符号は単独のイメージである。以下同様。

連想項目は17項目で、調査協力者Aによって【先生がいい】【コミュニケーションが大事】【授業方法が斬新】【クラスメイトがいい】【意欲が湧いてくる】、5つのクラスターに分けられた。

クラスター1は〔大いに役に立つ〕から〔先生がいれば質問できる〕までの5項目である。アプリで外国語を学習したことがあり、質問できる人がおらず、なぜ自分の答えが正しくなかったのかを知る由もなかったが、〔先生がいれば質問できる〕。先生がアクションや語呂合わせを使って教えてくれ、〔面白くて印象に残りやすい〕。皆いい人であり、わからないことがあれば、先生やTA、クラスメイトに〔プレッシャーや恐れを感じずに質問できる〕。また、一か月の夏休みを終え、学校生活に再び慣れる必要があり、しかも新しい環境で新しい言語を学ぶのは、緊張しやすい私にとって容易なことではなかった。先生がいて、本当に〔大いに役に立つ〕。さらに、授業形式が柔軟で、学習の進度、休憩の時間、勉強の場所は自由に調整できるため、〔リラックスしてプレッシャーを感じず〕、満足感が得られる。このクラスターは【先生がいい】と命名できよう。

クラスター2は〔家族は時々一緒に練習する〕から〔口頭表現が好きになった〕までの6項目である。高校まではコミュニケーション障害であったが、家族の愛と支えによって一歩踏み出し、克服できた。家で文や単語を練習するとき、〔家族は時々一緒に練習する〕。日本語を勉強したことがない家族が恥ずかしがらずに隣で復誦するのを見ていたら、自分ももっと勉強に積極的になった。時々、家族に学校での出来事や試験の結果を話すと、褒めてくれるので、達成感を感じる。また、授業では口頭試験があり、クラスメイトたちが隣で練習しているのを目にすると、自分ももっと練習したくなり、皆と一緒に頑張ったり、高め合ったりしたいと思う。皆と一緒に練習するのは本当に楽しい。授業のおかげで、〔口頭表現が好きになった〕。今はまるでピラミッドの底辺にいるようで、この授業が終わっても〔習い続けて能力を上げたい〕。いつか頂上まで登ってい

きたい。このクラスターは【コミュニケーションが大事】と命名できよう。

クラスター3は〔従来の授業形式なら興味はなかった〕から〔授業形式は斬新で従来の授業よりも好きだ〕までの3項目である。従来の授業では多くの教師はただ単に教科書に書いてある内容を読み上げるのみで、生徒たちはただ目で教師が読み上げた文字を追ったり、教師に言われるまま書いたりするのみで、退屈でロボットのようであり、教室は静かで活気がなく、寝たり、絵を描いたりしている生徒もいたから、うちで自力で勉強したほうが効率がいい。教師やクラスメイトとインタラクションがある学習スタイルのほうが、活気を感じられる。周りが活気がなかったら、疲れを感じるが、皆が生き生きして勉強していると、自分も勉強したくなる。

また、従来の教師による一方的に知識を教え込む授業形式では、自分でなんとか知識を吸収しなければならず、ついていけなくても聞き流すことが多かったが、動画があれば理解できるまで繰り返し見ることができる。そして、タスクシート+動画の学習スタイルは〔家でも復習できる〕。このような〔授業形式は斬新で従来の授業よりも好きだ〕で、勉強が楽になる。自分で何かをすると、達成感が得られ、その達成感に支えられ、もっと勉強したくなる。さらに、家で復習する時、家族が時々一緒に練習してくれるため、口に出して話すのがますます好きになった。このクラスターは【授業方法が斬新】と命名できよう。

クラスター4は〔口頭表現が重要だ〕から〔クラスメイトと一緒に頑張りたい〕までの3項目である。言語学習においては〔口頭表現が重要〕である。この授業のイメージを聞かれたら、最初に目に浮かぶのは皆が楽しく一生懸命に会話練習をしている授業風景である。周りの人が一生懸命練習している姿を目にすると、自分ももっと前向きになり、積極的に練習したくなる。しかし、何回グループワークした後、皆がいくつかの小さいグループになってしまい、他のグループに入り込むのが難しく感じた。まだ教室の後ろに座って

いる〔クラスメイトと知り合う機会がない〕まま、授業はもう終わってしまい、非常に残念に思っている。もっと多くのクラスメイトと仲良くして、〔クラスメイトと一緒に頑張りたい〕。このクラスターは【クラスメイトがいい】と命名できよう。

クラスター5は〔遅れ気味の人がいる〕から〔幸い TA がいる〕までの3項目である。先生は50～60人を相手にして、先生はとても疲れているようだが、〔幸い TA がいる〕。先生と TA が学生たちの口頭試験、同じ内容を何回も繰り返して聞いている姿を目にすると、大変だと思うが、学生たちにとって勉強になると思う。できなくても先生や TA に聞かずにただ座っている人を見かけると、昔の自分のことを思い出し、何かできることはないかと手助けしたくなる。こうすれば、先生や TA の負担を減らせることができるだけでなく、それによってもっと多くの人と仲良くなれる。また、他の学習者が自分の進度を超え、先生や TA のところに行って口頭試験を受けている姿を見ると、自分も〔よい意味でのプレッシャー〕を感じ、もっと勉強の意欲が湧いてくる。

従来の授業形式で10年以上勉強してきて、この授業の授業形式に慣れていないクラスメイトを目にし、そして今回の授業を受け、今まで授業ではいつも言われたことしかしてこなかったことに気づいた。これからはほかの授業ではただ座って聞きながすのではなく、教師の授業形式に合わせて自分の勉強の仕方を調整して行きたい。このクラスターは【意欲が湧いてくる】と命名できよう。

全体として、教師からの直接的なフィードバックと面白い教授法は学習のプレッシャーを減らし、新しい環境への順応の助けとなり、【先生がいい】と評価している。【授業方法が斬新】で伝統的な授業形式から脱却した授業形式では、受身的な学習スタイルから積極的に主体的に学習へ関与し、学習【意欲が湧き】、満足感を得られ、教室はクラスメイトとの積極的な交流し、切磋琢磨することで、【クラスメイトがいい】と【コミュニケーションが大事】だということに気づき、教室が高め合う環境となった。そして、タスクシー

トと動画があるため、家でも復習でき、その際に家族が時々一緒に練習してくれ、コミュニケーション能力の向上に寄与し、学習への情熱を醸成した。つまり、学習意欲の向上において革新的な授業形式、教師のサポート、クラスメイトとの積極的な交流、家族の影響が重要な役割を果たしている。これら全ての要素が合わさって学習意欲を高め、授業外でも学習を続ける動機を与えている。この点についてインタビューでは調査協力者 A は「従来の授業では結果（試験の結果など）を重視し、学習プロセスを蔑ろにしてしまうことがあり、孤独を感じていた。この授業を受け、初めて学習プロセスも面白いということに気付いた。今は孤独に勉強せずに、クラスメイトや家族と一緒に勉強でき、学習プロセスを楽しんでいる。環境と人は非常に重要な要素である」と述べている。

4.3.2 調査協力者 B の事例

調査協力者 B のクラスター分析の結果は図 6 のようになった。刺激文から 24 項目を連想した。

まず連想項目の中で、重要度の高い順にほぼ 1/3 となる 8 項目を取り上げると、① [かなり自由]、② [タスクシートの内容が豊富だ]、③ [グループ練習は緊張する]、④ [先生、TA はとてもまじめだ]、⑤ [親交を深められる]、⑥ [友達ができる]、⑦ [先生はとてもいきいきとしている]、⑧ [学習内容が覚えやすくなる] となる。

この 8 項目から見ると、調査協力者 B にとっての単元内自由進度学習は、自由で活気がある学習環境であり、先生や TA のまじめな姿勢、豊富な学習内容が特徴である。グループ練習は緊張感がありながらも、クラスメイトとの親密な関係を築き、友情を深める機会となり、学習内容の記憶に役立ったことが窺える。次に全項目の単独でのイメージを見ると、プラスが 21、マイナスが 1、どちらともいえないが 2 である。全体から見ると、調査協力者 B は単元内自由進度学習に好感を持っていると言えよう。

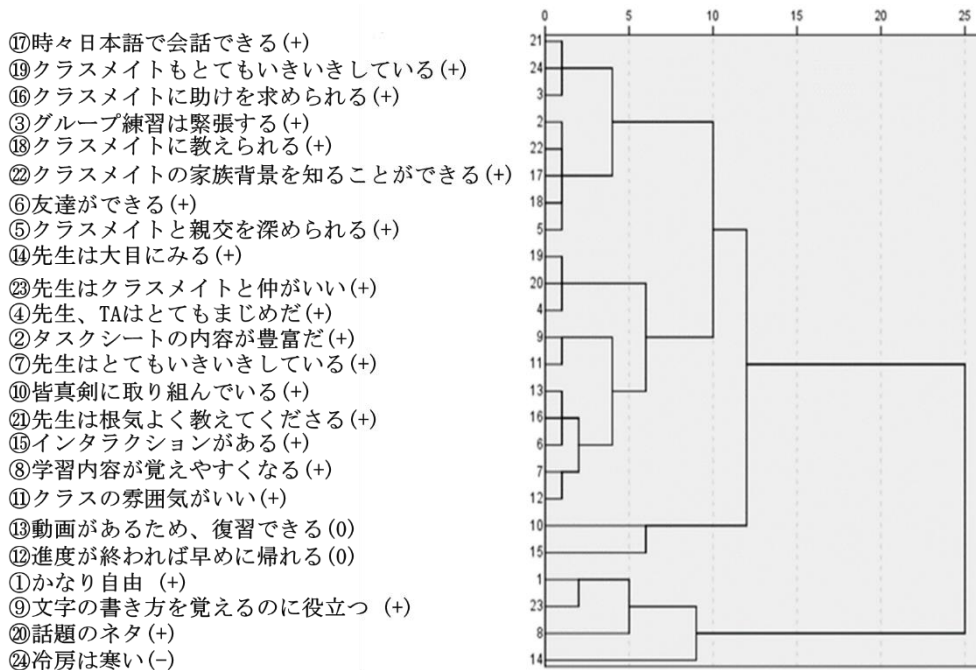


図 6 調査協力者 B のデンドログラム

連想項目は 24 項目で、調査協力者 B によって【クラスメイトとの関係構築】【先生がいい】【自由】【役に立つ】、4 つのクラスターに分けられた。

クラスター1〔時々日本語で会話できる〕から〔親交を深められる〕までの 8 項目である。授業でクラスメイトと〔時々日本語で会話でき〕、インタラクションの機会が多く、クラスメイトの家族構成などを知ったり、友達となったりすることができる。また自分がわからない時、〔クラスメイトに助けを求められ〕、クラスメイトがわからない時、〔クラスメイトに教えられる〕。そして自分が足手纏いにならないように、もっと努力したくなる。普通なら出来なくて、誰も手を差し伸べてくれなかったら、諦めてしまうが、クラスメイトの助けがあり、クラスメイトに追いつきたくなる。このクラスターは【クラスメイトとの関係構築】と命名できよう。

クラスター2 は〔先生は大目にみる²⁶〕から〔先生は根気よく教えてくださる〕までの 7 項目である。先生は教育熱心であり、用意

²⁶ 調査協力者 B によると、口頭試験では教師より先輩 (TA) のほうが厳しかったそうである。

した教材は豊富である。いつもいきいきしており、学生とも仲がよい。そのため、学生も真面目に先生の話聞き、昔のような先生が教壇で授業し、学生が下で自分のことをやるという授業風景にはならない。このクラスターは【先生がいい】と命名できよう。

クラスター3は「インタラクションがある」から「かなり自由」までの6項目である。授業では動画を見ながら、タスクシートを完成させる。サラリーマンのように、皆が自分のことに専念したり、必要に応じて同僚とインタラクションしたりする。もしどう話せばいいのかがわからないところがあれば、クラスメイトに聞くことができる。練習すれば、もっと覚えやすくなる。早めに進度を完成すれば、他のことをしたり、次回の小テストの準備をしたりすることができる。ストレスを感じたり、退屈でぼうとしたりすることはない。このクラスターは【自由】と命名できよう。

クラスター4は「文字の書き方を覚えるのに役立つ」から「冷房は寒い」までの6項目である。筆記試験では、文字や50音の順番を覚えることができる。日本語を全学の必修科目としてしている大学はあまりないので、友達にT大学では日本語は必修科目であることを話すことができ、「話題のネタとなる」。もし、将来、友達が日本に誘ってくれれば、日本語を通訳したり手助けしたりできる。このクラスターは【役に立つ】と命名できよう。

全体として、単元内自由進度学習により、教室は学習者同士の活発な交流、教師と学習者の積極的な関わり合い、そして自律的な学習機会の提供を特徴とする「会社」のようなコミュニティを形成している。学習者たちはお互いに支援し合いながら、それぞれの学習目標に向かって進む「職場の同僚」のように振る舞い、【クラスメイトとの関係構築】を深めている。教師は「課長」の役割を果たし、ガイダンスとサポートを提供することで、学習者たちの学習過程を豊かにし、【先生がいい】と感じさせる。このような環境では、学習者は【自由】に学び、進捗に応じて自らのペースで調整することができた。さらに、授業での練習や試験が文字の書き方を覚えるの

に役に立つことに気づき、学外の友達との会話のネタにもなり、日本語の勉強は【役に立つ】ことを実感している。

4.4PAC 分析のまとめ

本実践では学習者が進度に沿って自分の学習状況に合わせて動画を視聴しながら、タスクシートを完成させてから様々な練習に取り組む授業形式で行い、これにより学習者は単なる教師の指示に従うのではなく、教室内外で自分のペースで学習し、自律学習を促し、より主体的かつ能動的になり、「学習の個性化」が実現できた。

従来のような教師による意図的なグループ分けやクラスメイトとのインタラクションの指示がなく、教師がデザインした個人、ペア、グループでの練習や口頭試験を通じて、必要に応じ、わからないことを教え合い、単元内自由進度学習に慣れていない人を支援する「協働的な学び」が実現し、クラスメイトとの親交を深め、学習内容が定着し、会話能力の向上にも役に立った。さらに、グループ練習では足を引っ張らないように、そして進度が進んでいる人がいれば良い意味でのプレッシャーを感じることで、教室が高め合う環境となった。それにより学習者が自由でありながらも学習に真剣に取り組んでおり、そしてインタラクションがあるため、教室が活気に溢れ、学習者が生き生きした様子を見せた。

また、教師は学習者に様々な方法で丁寧に根気強く指導し、質問に答え、授業に活気をもたらし、学生と良好な関係を築いている。単元内自由進度学習により学習者のみならず教師も一方向的な授業形式から解放され、多くの時間を学習者との接触に割ることができ、個々の学習者のニーズに対応できるようになり、「指導の個別化」が実現できた。

このような他者との関係構築は教室に止まらず、家庭で復習の際に家族と一緒に練習する、将来家族や友人と日本を旅行するというような教室内での学習が教室外での社会関係構築にも繋がった。それにより学習者が外国語を話すのが好きになり、授業が終わっても

習い続けたいという気持ちが湧き、学習意欲の向上を促し、学習プロセスを楽しめるようになった。

近年、同期型や非同期型のオンライン授業が増えている。アプリでの学習や動画視聴などの非同期型のオンライン授業では質問があっても、聞ける教師がいない。同期型のオンライン授業では周りの環境に影響されやすく、対面授業のように学習への興味と参加を促進する環境を作るのが困難である。つまり、教師の対応とクラスメイトとの協同こそが対面授業の価値を生み出すものである。単元内自由進度学習は、学習者が自分自身の能力を最大限に発揮し、他者とインタラクションする中で学習過程全体を通じて意味のある学習体験を積み、安全で非暴力的、包摂的、効果的な学習環境を提供できる学習スタイルであると思われる。

5. 終わりに

本稿では非専攻のJFL日本語教育の入門期クラスにおいて、「単元自由進度学習」の実践を行った。その後、定期試験の成績、アンケート調査、調査協力者2名によるPAC分析の結果から、量的・質的な分析と考察を行った。

アンケート調査から学習者が授業のデザインを高く評価しており、特に学習の自由度と柔軟性及び練習機会の多さを重視していることが明らかになった。アンケート調査とPAC分析から、単元内自由進度学習において自由な進度での学習が可能になり、自分の学習ペースを自ら調整し、自分の学習スタイルに合った方法で知識を吸収し、粘り強く学習できるようになり、個々の学習者にとっての「個別最適な学び」の実現が期待できることが示された。実際に、次の学期の進度まで勉強した学習者も何人かいた。そして、教師と学習者のインタラクションが多いこと、クラスメイト同士での助け合いが行われていることから、充実したサポートの下、学習者が協調性を持って取り組めたという学習環境が伺える。このことは学習者が互いに知識を共有し合い、学習過程で直面する課題を乗り越えるた

めの「協働的な学び」の実現に繋がる。このような学習環境は、学習効率を向上させると同時に、教室内外での社会的相互作用の機会を増やすことで、学習者のモチベーションの向上にも寄与している。

以上の効果は定期試験の結果にも反映されており、一か月で一学期分の内容を学習するにもかかわらず、平均点、中央値ともに高く、標準偏差値が小さく、不合格者数も少なかった。

つまり、単元内自由進度学習の導入により、「多様な学習者」は個々の状況やニーズに合わせて教師やクラスメイトから「必要な支援」が得られ、「共に」効果的に学べ、「誰一人取り残されず」、教師も個々の学習者のニーズに合わせて支援を提供できる「DE&I」な学習環境の提供が期待できる。

一方で、教師が意図的にグループ分けを行わず、学習者の自主性を尊重し、自由にクラスメイトとインタラクションさせたところ、授業回数が進むにつれ、いくつかの小さなグループが固定化し、他のグループへの参加が難しくなる傾向が見られた。この点についてはタスクの多様化や、一緒に活動したことがない学習者との活動による加点制度の導入などにより、学習者間の新たなインタラクションを促すことが考えられる。また、この実践では、振り返りを強制せずに任意で記述させたところ、時間が経つにつれ、振り返りを行う学習者は一部に限られてしまった。この点については振り返りを授業活動の一部として組み込むことが考えられる。これらの点については、授業デザインにおいてさらなる改善と調整が必要であり、今度の課題としたい。

<付記>

本稿は國家科學及技術委員會の補助（113-2914-I-216-003-A1）を受けて参加した「2024年日本語教育国際研究大会」（2024年8月1日～8月3日アメリカ・ウィスコンシン大学マディソン校で開催）における口頭発表の内容に加筆修正を行ったものである。

参考文献

- 石原浩一・泰山裕（2023）「単元内自由進度学習におけるクラウドの活用が学力層ごとの基礎知識定着に与える影響」『日本教育工学会論文誌』24、pp.1-4
- 外務省（不明）『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ 仮訳』
<https://reurl.cc/4j2Y2D>（2025.01.10閲覧）
- 北濱康裕・小林祐紀（2023）「中学校理科において自由進度学習を取り入れた授業設計が主体的に学習に取り組む態度と学習内容の理解に及ぼす影響－スライド作成アプリを活用したデジタルワークシートを用いて－」『茨城大学教育実践研究』42、pp.221-234
- 黄聖文（2020）「台湾の大学における非専攻日本語初級クラスでの反転授業の可能性」『東呉日語教育学報』53、pp.86-114
- 黄聖文（2021）「日本語初級クラスにおけるアクティブラーニング型反転授業の実践研究－T大学を例に－」『台湾日語教育學報』36、pp.87-118
- 黄聖文（2024）「JFL入門期クラスにおける「自由進度学習」の実践－大学早期履修制度のクラスを対象に－」マディソン2024 日本語教育国際研究大会
- 内藤哲雄（2002）『PAC分析実施法入門 [改訂版]：「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 難波駿（2023）『超具体！自由進度学習はじめの1歩』東洋館
- 比嘉俊（2002）「学習の個別化とその評価－中学校理科教育実践を通して－」『琉球大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』9、pp.127-136
- 富士村拓郎（2022）「カリキュラム・マネジメントに取り組む学級担任が抱える課題とその対応－単元内自由進度学習の実践をもとに－」『山形大学大学院教育実践研究科年報』13、pp.296-299

- 文部科学省（2021）「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して
～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協
働的な学びの実現～（答申）【概要】」
<https://reurl.cc/bVAG01>（2025.01.10閲覧）
- 文部科学省（2022）「義務教育の在り方ワーキンググループ（第2
回）議事録」<https://reurl.cc/G4M5Ky>（2025.01.10閲覧）
- 矢澤拓真・村上茉椰・篠崎正典（2022）「生徒の「歴史的な見方・
考え方」を用いた問題解決能力の育成を目指す授業の構想－単
元内自由進度学習を手がかりとして－」『教育実践研究』21、
pp.111-120
- 矢澤拓真・村上茉椰・篠崎正典（2023）「生徒の「歴史的な見方・
考え方」を用いた問題解決能力の育成を目指す授業の構想（2）
－单元内自由進度学習における「個人追究」の役割に着目して
－」『教育実践研究』22、pp.89-98
- 渡辺秀貴（2023）「「自由進度学習」とは？知っておきたい【教育
用語】」<https://kyoiku.sho.jp/239588/>（2025.01.10閲覧）